

布瑠部由良由良

石上神宮 手の術

ひふみよいむなやこと
一二三四五六七八九十

とくさのはらえのことば
十種 被 詞

たかまのはら かみづまりま すめむつかむろぎ かむろみ みことも すめがみたち いあらわ たま
高 天 原 に 神 留 坐 ず 皇 親 神 漏 岐 神 漏 美 の 命 以 ち て 皇 神 等 の 鑄 躰 し 給 ふ

とくさ みづのたから にぎはやひのみこと さすけた あまつみおやのかみ ことおしへのりたま
十 種 の 瑞 宝 を 饒 速 日 命 に 授 給 い 天 津 御 祖 神 は 言 誨 詔 給 は く

いましみこと みずのたから も とよあしはら なかつくに あまくだりま
汝 命 この 瑞 宝 を 以 ち て 豊 葦 原 の 中 國 に 天 降 坐 して

みくらたな しず おき あをひとくさ やまひ こと このとくさ みずのたから も
御 倉 棚 に 鎮 め 置 て 倉 生 の 病 疾 の 事 あ ら ば 茲 十 種 の 瑞 宝 を 以 ち て

ひふみよいむなやこと とな
一二三四五六七八九十と 唱 へ つ つ

ふるべゆらゆら ふるべ な まかりしひと い かへ ことおしへたま まに
布 瑠 部 由 良 由 良 と 布 瑠 部 か く 為 し て は 死 人 も 生 き 反 ら む と 言 誨 詔 給 ひ し 隋 ま に

にぎはやひのみこと あめのいはふね の かはちのくに かはかみ いかるがみね あまくだりましたま
饒 速 日 命 は 天 磐 船 に 乗 り て 河 内 國 の 河 上 の 哮 峯 に 天 降 坐 給 ひ し を

そのちやまとのくにやまべのこほりふる たかには いそのかみのかみのみや うつ しづ いつきまつ
爾 後 大 和 國 山 辺 郡 布 留 の 高 庭 なる 石 上 神 宮 に 遷 し 鎮 め 齋 奉 り

よよそ みずのたから みをしえこと あをひくさ ため ふるべ かみごと つかへまつ
代 々 其 が 瑞 宝 の 御 教 言 を 倉 生 の 為 に 布 瑠 部 の 神 辞 と 仕 奉 れ り

かれ みずのたから おきつかがみ へつかがみ やつかのつるぎ いくたま たるたま まがるがへしのため
故 この 瑞 宝 と は 瀛 津 鏡 辺 津 鏡 八 握 劍 生 玉 足 玉 死 返 玉

ちがへしのため へみのひれはちのひれ くさぐさもののひれ とくさ
道 返 玉 蛇 比 礼 蜂 比 礼 品 々 物 比 礼 の 十 種 を

ふるのみたまのかみ たふと いや いつきまつ よし
布 留 御 魂 神 と 尊 み 敬 ま ひ 齋 奉 る こ と の 由 縁 を

たいら やす きこしめし あをひとくさ うへ か か わざわひまたもるもる やまい
平 け く 安 ら け く 聞 食 て 倉 生 の 上 に 罹 れ る 災 害 及 諸 の 病 疾 を も

ふるひの はら や たま いのちなが いかしやぐはえ ごと
布 留 比 除 け 被 ひ 却 り 給 ひ 壽 命 長 く 伊 加 志 八 桑 枝 の 如 く

たちさかえ ときは かきは まも さきは たま かしこ かしこ もう
立 栄 し め 常 磐 に 堅 磐 に 守 り 幸 へ 給 へ と 恐 み 恐 み 申 す

はらのことば
ひふみ 被 詞

ひふみよいむなやこともちろらねしきるゆみつわぬそをたはくめかうお系
にさりへてのますあせえほれけ。

とくさのかんだからのおほみな
十種神大御名

おきつかがみ へつかがみ やつかのつるぎ いくたま たるたま まかるがへしのたま ちがへしのたま
瀛津鏡。辺津鏡。八握劍。生玉。足玉。死返玉。道返玉。

へみのひれ はちのひれ くさぐさのものひれ ふるべゆらゆらとふるべ
蛇比礼。蜂比礼。品々物比礼。布瑠部由良由良止布瑠部。

加計呂麻島の民話「鬼と四人と子ら」

ムカシ、ダーガロ ナン、アンマ トウ ユタン ヌ クウ ヌ ウタム チ。

昔 何処かに母親と四人の子どもがおったとき。

イティガアロ、アンマ ヤ ヤマバテッカチ ハンメ トウリギヤ イジャム チ。

いつだったか、母親は山畑へいも(ハンメ=主食)とりにいったとき。

シャットウ イェイト アメ ヌ フテイ、

しきりに雨が降って、

ハティヘ ヌ ムエー ヌ コーナン ケヘラットタン ハシ ヌ ナガレタム チ。

畑の前の川にかけられていた橋が流されたとき。

ユー ヤ クレテッキュル アメ ヤ フリュル アンマ ヤ クワンキャ ヌ クトウ ヤ

日(ユー=世)はくれてくるし雨は降るし母親は子どもらのことは

シワ ナリュル、「イキヤー スルバ イツチャルカ ヤー」チ ナチュタム チ。

心配になるし、「どうすれば(如何)すればいいかねえ」と泣いていたとき。

シャットウ ユー ヌ クラクラグウ ナリン、ヤマ ハラ ウニ ヌ ウリティッチ、

すると日が薄暗くなったとき、山から鬼がおりてきて、

アンマ バ ティカディッカラ アンマ コウブイ トウ カオ ヌ コー バ ハジッカラ

母親をつかまえてから母親の頭とカオの皮をはいでから

ドウヌ ヌ カマチ トウ テラ ナン ウチティケテ、アンマ バ カティッカラ、

自分の頭と顔にうちつけて、母親を食べてから、

アンマ キン キチ アンマ ティノゲ カブティ ティル カッゲテ

母親の衣を着て母親の手ぬぐいをかぶってティル(背負籠)をかついで

ヤー ハチムドテッチャム チ。(中略)

家に帰ってきたとき。

ユタンヌクウキャ ヤ ホホラシャ シイ タチャガティ「アンマーウモレ」チ アプエタム チ。

四人の子どもらは嬉しくなって立ち上がって「おかあさん、おかえりなさい」とさげんだ。

アンマ マネーシャン ウニ ヤ ティノゲ カブティ フシャフシャ シャーガチャナ

母親のまねをした鬼は手ぬぐいをかぶって伏目がちにしながら

「ナマ アタド ヘー クウンキヤー」チ イチャム チ。

「今帰ったよ、子どもたち」といったとき。

クウンキヤ ヤ「ハグエー、アンマー、マチナグエサリョータドー アンマー」

子どもらは「まあ、おかあさん、待ち遠しかったのよ、おかあさん」

チ イチ、トゥブスガタム チ。

といて、とびすがったとき。

～（加計呂麻島の子守歌）～

アンマ ヤ 「デ、デ、ユーバン ヌンキヤ スイロー ヤー」チ イチ、ハヌス バ

母親は「さあさあ、夕ご飯にしようね」といて、イモを

ティル ハラ ウンゾークエ ハチ クブチ ヤー ヌ ムエー ヌ コッグウ ナンティ

「テル」からざるにこぼして、家の前の小川で

アロテッチッカラ ウルバ ニチ ヤスインシュ ダカ ニチ、クウンキャン

洗ってきてからそれを煮て、野菜も煮て、こどもらに

「ウレ、ウレ、クウンキヤ、ユーバン ヌンキヤ カムエヨヘー」チ イチ、

「それ、それ、子どもたち、夕ご飯など食べなさいよー」といて

ショーチ イジャチャム チ。

仕度してだしたとき。

クウンキヤ ヤ「アンマ ダカ マジエン ミシヨロ デイ」チ イチ、

子どもらは「おかあさんもいっしょに食べましょうよ」といて

「ハグエー、ヤースタ」チ イエイト ウツタムエタム チ。

「あー、おなかがすいた」とうんとほおばったとき。

アンマ、ヤ「ユーバン カダラバ ヘクネブレヨ クウンキヤ」チ イチャットウ、クウンキヤ

母親は「夕ご飯食べたらず早くねむれよ、子どもたち」といたので、子どもら

（中略）

ニワガムナン ガキグエ ヌ アタットウ ガン ヌブティ ヨーリッグウ シュータム チ。

庭のかみてに柿の木があったので、そこにのぼってじいっとしていたとき。

（中略）

アンマ ヤ「ウン スイロムンムンキヤ ヤ ヒンギティドウ アラウレバ ヤー」チ

母親は「あのうそつきたちは逃げてありやがるなー」と

フティグウトウシ イエイト トウムエテ アツチャム チ。

ぶつぶついつてしきりにさがして歩いたとき。

シャットウ ニワガム ヌ イキ ナン カゲヌ ウツティ

すると庭のかみての池に影がうつって

ガキグエ ナン ヌブトゥンムン ヌ ミリヤッタム チ。

柿の木にのぼっているのが見えたとき。

アンマ ヤ イキバ ミチッカラ

母親は池を見てから

「ウン スイロムンヌンキャ ヤ ムイッティ ヌ ナハ ナンド イッチュルバヤー」

「あのうそつきたちは水の中に入っているぞ」

チ イチ、ミーティケェタム チ。

といてにらみつけたとき。

ガンシ シッカラ 「ワー ガ デ ティカディ ミシロ」チ イチ、

そうしてから「私がさあ、つかんでみせよう」といって、

イエイト イキ ヌ ムイッティ ヌダム チ。

さかんに池の水を飲んだとき。

テーンテン ムイッティ ノミハテテ ニヤーリッグワ ノホルガディ ヌダム チ。

だんだん水を飲みつくしてほんの少し残すまで飲んだとき。

「ウレ ニヤー ジャガ」チ イチ、ウン ムイッティ ヌムハテタットウ アンマル ウフサ

「それ、もうすぐだ」といって、その水を飲みつくしたところ、あんまりたくさん

ムイッティ ヌダンムンナティ ワタ ヌ ハチギリティ ウニ ヤ モール シヤム チ。

水を飲んだので、腹が破れて鬼は死んでしまったとき。

ニヤー ガッサ ド。

もう、それだけだよ。

吉増剛造「地獄のスケッチブック」。(詩集『わが悪魔祓い』より)

狂気の一点をめざしてはしりよってくるものは銀色の楽器、風といわれるものの発生する「馬の湖」とよばれる幻の地よりうちよせる、かつていかなる音楽家によっても書かれえず、いかなる音楽家によっても聞かれなかった音にのって、一千頭の馬、若駒、一千頭の馬が宇宙の前面に衝突結晶する、これは水晶の詩だ

着陸点は狂っていなかったがゆえにいま鳥の感覚を復活させることができる、魔のような大陸に感謝だ！

おお、巨大な、巨大な、狂おしの鳩ポッポがなぜ楽器の形状でわが頭脳にある渚にやってきたかが判明する、正確無比の悪い自然なる魔のような大陸にふたたび感謝だ

^{こがね}黄金村や^{しぶたに}渋谷村のある、無数の白骨の村のある魔の大陸は、ズッテンドウと反転する、たかが茫然たる狂想などもともせぬ輝く剣尖のあおりをくらって馬の尻、地獄を通行する老婆だぞ、おれは通行する

白骨の村のある魔の大陸の燃える頭脳の祭司である、エドガー・ポーの「ウィリアム・ウィルソン」の通過した黄金の谷を静かにくだりゆけば自殺もクソもあるものか、自然もクソも革命もクソもあるものか、海なんてものは人間にとって単なる能書だ。

一千頭の馬、若駒、一千頭の馬、水晶の詩の中心に結晶せしめん、あとは沈黙、詩という怪物、沈黙、時代は小うるさいははであったからな

狂気の一点をめざしてはしりよってくるものは銀色の楽器、馬の頭、中心の爆発的速度の静けさがたちあがって青年の想像する宇宙、即ち一瞬のうちに生きてしまう青年の宇宙はついに幻であるから言葉

言葉、言葉、実在する^{こがね}黄金村や^{しぶたに}渋谷村の、地獄を歩いてゆくと遠く灯のみえる、あるいは精霊崇拜の枯野から夢みるようにみえはじめる、一点の光明の、言葉の、^{こがね}黄金村や^{しぶたに}渋谷村、^{こがね}黄金村や^{しぶたに}渋谷村で、^{こがね}黄金村や^{しぶたに}渋谷村で、ついに恋する^{こがね}黄金村、おれも一人のプトレマイオスで天文台に恋をしかけ、あらゆる

中心を愛したが、これが王道の、^{こがね}黄金村や^{しぶたに}渋谷村の、彼方のなんと超感覚的な桜新町、ああ「柳」という人も住んでいる、^{こがね}黄金村や^{しぶたに}渋谷村、砧という朝鮮村に住んだのも美しくも正確な夢の紀行であったのだ、ああ、スタスタ立ち去る柳かな、夢のアフリカに住んで呪いはとけて、^{こがね}黄金村や^{しぶたに}渋谷村、コカ・コラに太陽は^{こんじき}金色にとけこみ、夢みれば女はすべて美しい、夢みれば男はすべて美しい、^{こがね}黄金村や^{しぶたに}渋谷村、この夕暮れこそ^{ふるさと}故郷なれ、千本桜の死骸の国で安シャンデリアがチャラチャラ鳴るが、なぜか死者が^{ほほえ}微笑む気配、ああ、水晶の王国、はるか彼方の「馬の湖」から酒精が流れてきて、いま^{こがね}黄金村や^{しぶたに}渋谷村、地獄は、夕暮れの輝きは異様な美しさをおびはじめている

月日は^{はくだい}百代の^{くわかく}過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。船の上に生涯をうかべ、馬の口をとらへて老をむかふるもの日々旅にして、旅をすみかとする。夢の旅だ、幻の旅だ、古人も多く旅に死せるあり、予もいづれの年よりか片雲の風にさそはれて漂白のおもひやまず、夢は美人の、^{こがね}遊女の^{こがね}黄金の宿だ、幻の旅だ、ああ、^{こがね}黄金村や^{しぶたに}渋谷村、^{みやこどり}都鳥の、幻の王国をさすらひ、漂白のおもひやまず「馬の湖」、古調はとこしえに懐かし、海上の声をきく、ああ、漂白のおもひやまず。海辺にさすらひ、^{こぞ}去年の秋江上^{かうじやう}の破屋に蜘蛛の古巣をはらひてやや年も暮れ、ああ、やや年も暮れ、春立てる霞の空に白川の関こえんと、^{がみ}そぞろ神のものにつきて心くるはせ、これこそ芭蕉のもっとも物狂おしの、もっとも狂おしのそぞろ神の、そぞろ神のものにつきて心くるはせ、道祖神のまねきにあひて取るもの手につかず、手につかず、なかば憑かれて、夢に憑かれて、股引きの破れをつづり、傘の緒つけかへて、三里に灸するより松島の月先づ心にかかりて、住める方は人に譲り^{さんぼう}杉風^{べつしよ}が別荘にうつる。夢の旅だ、幻の、上野から、幻住庵までそぞろ神のものにつきて心くるはせる夢の旅。これこそ蕉翁の夢、桃青の夢。中国まで遠し、支那の男は走る馬の下で眠る といわれる中原に達する、これが桃青芭蕉の夢だ。

竹馬

竹馬

竹馬

風が吹いている

^{しぶたに}渋谷村で

ある日ひそかに

私注をつけた

それは

このようなものだ

私は自分を恋愛至上主義者とおもいたかったらしい。しかしいま、この詩を、詩ともいえぬかもしれぬものを書きおえて気がついたことがある。私には詩を自分で異常だともうほど至高のものとする性癖がある。その理由は、私にはわからない。そして、この詩で、私は詩そのものにむかって、かなわぬながらたちむかう一人の必死になっている存在をはじめて確認しえたと記しておく。

^{しぶたに}渋谷村や^{こがね}黄金村

この悪魔被いは一体なんだ、呼吸か恋愛なのか

大混乱をめざし書きつぐであろう

これは優柔不断の

狂人よりの伝言である

秋の歌（ボードレール詩／福永武彦訳）

やがて僕たちはしずむだらう 寒い幽明のうちに、
さようなら、きららかな光、はかなく過ぎた僕たちの夏！
すでに、不吉な響きを立てて、中庭の敷石に
落とされる薪束の音は僕の耳を打つ。

全ての冬は僕の身裡に帰ってくる、
怒りと怨み、戦きと恐れ、厳しい強ひられた辛勞、
その時僕の心はもはや、極北の地獄に燃える
太陽にも似て、赤い凍ったかたまりにすぎないだらう。

僕は身を顫はせて聴く、地に落ちる薪の音を、
断頭台を築く木霊もこれほど鈍くはひびくまい。
僕の精神は、たとへば敵の手に砕かれる塔、
打ち破る重い大槌は倦むこともない。

絶え間なく落ちる響きは身にしみて、どこかに人の
急ぎ棺を打ちつける音かとも聞く、
それは誰のため？ ああ昨日は夏、今は秋！この
不可思議な物音は出発のように鳴りひびく。